

# ムーミンのルーツを探る ～トーベ・ヤンソンの人生から見るムーミン物語～

田中 結貴

(山 愛美ゼミ)

## はじめに

ムーミン谷にはさまざまな種族の住人が生活しており、またムーミン谷の外からもさまざまなキャラクターがやってくる。姿も形も考え方も異なるキャラクターたちが何かを求めてムーミン谷に住み着き、訪れる。そのキャラクター同士の織り成す関係性は、非常に興味深い。いまや世界的な大人気作である「ムーミン」は、今から約72年前の1945年にその第一作目が執筆された。日本でも三編のアニメーションと、劇場版映画一作が製作され、その人気は今でも健在である。

作者の価値観や経験が全て物語に反映されているわけではないが、人と人との関わりに関する価値観は比較的物語に反映されやすいのではないだろうか。ムーミン谷という世界観を、作者のトーベ・ヤンソンはどのようにして思いついたのだろうか。本研究では、ヤンソンの生い立ちや、その過程で関わった人物たちがどのようにしてムーミン物語に影響を与えたのかについて考えていきたいと思う。

## 第1章 トーベ・ヤンソン

### 1-1 誕生～歩んだ人生

トーベ・ヤンソン（本名、トーベ・マリカ・ヤンソン）は、1914年8月9日、彫刻家の父ヴィクトル・ヤンソンと、グラフィック・アーティストの母シグネ・ハンマルステンの子としてヘルシンキに生まれた。トーベには上の弟のペル・ウロフと下の弟のラウルの2人の弟がおり、ラウルはのちにムーミン・コミックスの共同執筆者となった。

トーベは、1928年に14歳で期待の新人イラストレーターとして『アッラス・クロニカ』誌にてデビューした。印刷された作品としてはトーベに

とってこれが初めてのものとなった。また、翌年の1929年には、スウェーデン語の政治風刺雑誌『ガラム』に挿絵を描いた。14歳で芸術家人生をスタートさせたトーベだが、ここからすぐにムーミンが誕生したわけではない。29歳の頃、『ガラム』誌にムーミントロールの原型が登場し、翌年に正式にムーミントロールというキャラクターが誕生した。さらにその翌年の1945年に、ようやくムーミン物語第一作目となる『小さなトロールと大きな洪水』が刊行されるのである。

児童文学作家として名が売れたトーベは、芸術家としても生涯精力的に作品に取り組んだ。学校嫌いでも有名なトーベであったが、ヘルシンキのスウェーデン語系共学校を中退してからは、ストックホルム工芸専門学校、ヘルシンキのアテネウム美術学校、パリのアカデミー・グラン・ショミエール美術学校などの数々の芸術学校を卒業し、芸術家としての基礎を学び、雑誌の挿絵や、公共施設の壁画、コマ漫画の連載、小説の執筆、個展に出す絵画などを多く作り上げ、見聞を広げるために海外旅行をし、様々な知識人たちと知り合った。

1945年から1970年にかけてムーミン物語を執筆し、その執筆を終えてからも、『聴く女』（1971）、『少女ソフィアの夏』（1972）など多くの短編小説を書き上げ、1996年には『島暮らしの記録』というエッセイも執筆している。

そして2001年6月27日、86歳でこの世を去った。

### 1-2 関わった人々

トーベ・ヤンソンといえば、お気に入りの孤島で一人黙々と芸術に向き合っている姿が想像されるかもしれない。もちろんその側面も存在したが、トーベは大勢の人間に囲まれ、影響を受け、激動の人生を歩んでいったのである。

### 1-2-1 家族、父と母

父のヴィクトルは、トーベにとって芸術家として最も大きな存在であり、最初の手本にもなった。トーベの父、ヴィクトル・ヤンソンは、雑貨屋を営むスウェーデン語系フィンランド人の夫婦の間に生まれた。早くに父を亡くしたヴィクトルは、弟と一緒によく母の店の手伝いをした。決して楽な生活ではなかったが、ヴィクトルは二度のバリ留学をし、彫刻を学んだ。彫刻家としてのキャリアをスタートさせた後も、当時のフィンランドの彫刻界に天才芸術家のヴァイノ・アートルネンが君臨していたこともあり、時代を代表するような彫刻家にはなることはできなかった。戦時中のヴィクトルは戦争の英雄像や墓地のモニュメント制作などの彫刻作品や、タンペレやハティにある古代ギリシャ彫刻のような美しい男性ブロンズ像を手掛けたが、それは芸術家としての創造活動というよりは経済的な理由の方が大きかったのである。

内戦時に白衛軍側で戦った男性の例にもれず、ヴィクトルも左翼思想や共産主義は母国にあだなす存在であるという考えを持っていた。また、当時のフィンランドには新ドイツ派が大勢おり民衆はユダヤ人を嫌悪し、ヴィクトルもそのひとりだった。この政治的思想はトーベを深く傷つけ、ふたりに激しい対立関係を生み出した。トーベが明確に左翼主義だったという決定的な資料はないが、トーベがユダヤ人の恋人や左翼主義の友人と親しくしていることや、政治風刺雑誌でヒトラーやスターリンを批判する挿絵を描いたことは、ヴィクトルにとっては許しがたいことだった。

母のシグネ・ハンマルステンはトーベにとって人生の中心であり、最愛の人だった。トーベが立体物の創造よりも紙の上での芸術に進んだのは、家で熱心に絵を描く母の姿を幼い頃から見ていたことが大きいだろう。

シグネはスウェーデンの生まれで、彼女の父は王室付きの牧師だった。芸術の勉強のためにバリへ訪れた時にヴィクトルに出会い、恋に落ちた二人は結婚し、トーベを身籠った。1918年に勃発したフィンランド内戦、冬戦争、継承戦争で貧困を強いられることになったヤンソン家は生活苦に喘いだ。今までスウェーデンで何の不自由もなく

育ったシグネにとって、フィンランドでの生活は決して楽なものではなかっただろう。

父の傍らで生きる母を見て、トーベは結婚における女性の役割と己の仕事について深く考えることが多かった。結婚により、家庭のために芸術家としての第一線を退き、一家の稼ぎ頭として挿絵を描き続け、夫の制作活動を支える母の姿は、トーベの人との付き合い方や暮らし方に大きな影響を与えた。また、そのような母の姿からトーベは勤勉さを学んだのだった。

### 1-2-2 異性の恋人たち

トーベが歴代の恋人たちに求めたものは、少なからず共通していた。「新しい刺激」をトーベは人生で常に追い求めていた。

サムエル・ベスプロスヴァンニ（のちのサム・ヴァンニ）はトーベの芸術の師であり、友人であり、恋人だった。サムはトーベの6歳年上で、結核療養のために海外のサナトリウムを転々とした経験もあり、知的でカリスマ性もあり、芸術家としての才能にあふれていた。これは、まさにトーベにとって大恋愛であり、芸術家の卵としても大きな影響を受けたのだった。

タピオ・タピオヴァーラとの関係はトーベに苦い恋愛をもたらした。タピオが前戦から休暇で帰ってくるたび、トーベは自身の願望や欲望はすべてしまい込み、タピオを献身的にもてなした。トーベは、内心タピオが戦争で死んでしまうのではないかと思っていたが、前戦から送られてくるタピオの愛のこもった手紙に胸打たれ、トーベは彼と一生を共にできたらと考えるまでに至ったのだ。しかしこの恋がうまくいくことはなかった。タピオには浮気癖があり、女性から言い寄られると断れない性格だった。タピオは戦争をきっかけに開き直るようになり、トーベ以外の女性との関係を隠すこともしなくなった。「タピオが幸せならば」と許そうとも思ったがそううまくはいかず、トーベは嫉妬に苦しめられることになったのである。

アーツ・ヴィネルタンとトーベが知り合ったのは戦前のことだった。もともと共通の知人が多かった二人は、アーツが屋敷で開いたパーティーをきっかけに知り合うことになった。アー

トスは過去の恋人のサムやタピオとは違い、文学界の人間だった。そして彼を取り巻く友人や同僚たちも、同じく才気あふれる作家やジャーナリストが多く、トーベの人生に新しい刺激をもたらした。アーツとトーベの恋愛は、結婚に縛られない自由なものだったので、トーベはいろいろな人から「モラルがない」と責められた。当時はまだ結婚前の同棲は珍しく、特にヤンソン家のような保守的な階級では、未婚のままの同棲生活は非難される行為だった。

トーベはアーツと過ごした年月の中で、最初の5冊のムーミン物語を書き上げた。そして、彼が編集長を務めるヌウ・ティド誌に「ムーミン谷の彗星」をもとにして作られた最初のムーミン漫画である「ムーミンコントロールと世界の終わり」も寄せている。ムーミン物語に興味を持ったアーツは、トーベとの恋愛が終わってからもムーミン漫画の海外発展についての調査を続けた。

また、トーベは己の恋愛と芸術家という職業の間で大きく悩んだ。当時、芸術家同士の結婚は、妻が夫を支え生活をまわしていくことが当たり前だった。そのため、結婚した女性芸術家がその後も活躍し続けることは難しかったのだ。一家の稼ぎ頭となり夫を支える母シグネの姿を幼いころから見ていたトーベには、それが身に染みるほどに理解できた。

トーベは己が影響されやすい人間であることに気付いていた。どうしても情熱的な恋愛をすると交際相手に合わせてしまい、相手の影になってしまうのだった。トーベは芸術においても私生活においても束縛を嫌い、自由を追い求める人間だった。束縛とは結婚で、自由とは仕事だった。

また戦時中のフィンランドでは、女性の役割は戦争で失った命を新たに作り出すものであると考えられていた。そのため平和主義で戦争を憎んでいたトーベは、女性が産む機械になることも、兵隊になるために作られる子供たちの存在についても、激しく嫌悪感を抱いた。芸術家としての生命を絶たれる結婚や、消費されるための命を生み出すために母親になることなどを、当時のトーベは受け入れることができなかった。

### 1-2-3 新しい道

トーベが自身のレズビアンに気付いたのは、ヴィヴェカ・バンドレルとの出会いによってだった。トーベ・ヤンソンといえば、生涯の恋人が女性のトゥーリッキ・ピエティラだったことで有名だが、トーベは初めからレズビアンだったわけではない。

はじめての女性の恋人であるヴィヴェカとの恋愛はトーベに多くのものをもたらしたが、周囲からの風当たりは厳しいものだった。保守主義の強いフィンランドでは同性愛は1971年まで法律で禁止され、81年まで「病気」とみなされていたからだ。また、その頃トーベはまだ前の恋人であるアーツとの関係が清算出来ていなかったし、ヴィヴェカは既婚者だった。それでも、ヴィヴェカとの関係はトーベにとってまさに革命的な体験だった。「どうやってこの変化を説明すればいいのでしょうか。あなたに出会ってからなのです。あらゆる色彩も厚みを増し、ひとつひとつの色がより純粋で、すべての感情が敏感になり、喜びは強くなり、絶望はもっと激しくなります」。トーベはヴィヴェカにあてた手紙にそう書き綴った。ヴィヴェカとの関係は長くは続かなかったものの、トーベは彼女と出会い恋をしたことで自らに自信を持ち、不安やコンプレックスを追いやることができたのだ。トーベはついにアーツとの長年の関係を清算し、自身が女性を愛する人間であるという確信を持つのだった。

そして、トーベ・ヤンソンの人間関係を語るうえで外せないのが、生涯の恋人であるトゥーリッキ・ピエティラだ。『ムーミン谷の冬』を書き始めたころのトーベは、新聞連載やそれに伴うムーミンビジネスによって疲れ果てていた。そんなときに出会ったのが、グラフィックデザイナーで、アーティストのトゥーリッキ・ピエティラだった。彼女との出会いはトーベをときめきと安らぎが入り混じる、今までにない気持ちにさせた。新しいアトリエを探していたトゥーリッキは、トーベのアトリエのすぐ近くの空き物件を見つけそこに居を構えた。仕事と恋愛が両立できて、互いが互いの邪魔をしない、トーベが長年望んでいた生活がようやく訪れたのだ。

そもそも、トーベは、妊娠や結婚に対して無関

心を通り越し、否定的だった。その背景に大きくあったのは、父ヴィクトルの存在だったと考えられる。男たちの高圧的な態度や男同士の団結心、忠誠心にトーベはうんざりしていた。シグネの姿を見れば誰だってそう思うだろう。そして、自身の経験をもってしてもよく理解していた。また、子宝に恵まれたとして、男の子ならば兵隊にさせられて戦争へ連れていかれてしまう。非生産的だとトーベは思った。

トーベには夢があった。同じような志を持ち、共に歩める相手との人生を望んだ。男が威張り散らし妻がその陰で献身的に夫の世話を焼くような関係ではなく、上下関係のない対等な関係を望んだ。自身が、男性に対しすべてを捧げてしまう癖を自覚していたから、そういった願望に至ったのかもしれない。その結果が、女性を愛するということだったのだろう。

女性を愛するという、当時のフィンランドにとっては一大事である事案を、トーベは多くの悩みや困難に直面しながらも、自ら思うがままにやってのけた。

### 1-3 トーベが生きたフィンランド

トーベは人生で、第一次世界大戦、第二次世界大戦と、二度の大きな戦争を経験しており、この二度の戦争はトーベの人生やムーミン物語にも大きな影響を及ぼした。特に『ムーミン谷の彗星』(1946)はトーベの戦時中の体験や心情が色濃く出た作品となった。ほかにも、トーベの中の戦争という魔物は、時には自然、時には怪物と形を変えムーミン谷を幾度となく襲うのだった。そしてムーミンたちは仲間とともに、それに打ち勝ったり、ときにはやり過ぎたりして脅威と付き合っていく。

戦争で変わってしまった父を間近で見ていたトーベは、戦争を憎んだ。しかし、戦争を経験しなければ、トーベはここまで世界的に有名な芸術家として名を馳せることはなかっただろう。トーベは戦争を糧にして作品を作り上げることに没頭した。作品に戦争を投影させることで、自分の中の恐怖や孤独を昇華させたかったのかもしれない。

## 第2章 ムーミン

### 2-1 作品概要

トーベ・ヤンソンが世界的に有名な作家になったのは、この『ムーミン』という作品の功績が大きいのだろう。『ムーミン』は、主人公のムーミントロールという男の子を中心に、ムーミン谷という場所に住む住人たちや、ムーミン谷を訪れる人々が織りなす群像劇、冒険物語を描いた作品である。

ムーミン谷は、まわりが山や海で囲まれた自然あふれる場所で、その中にムーミンの住むムーミン屋敷や、スナフキンが暮らすテントなど、住人の家がぼつぼつ存在している。それは、いわば集落のようなものであり、時にムーミンたちは山や海に出かけ砂浜で貝殻拾いをして遊んだり、船着き場から冒険に繰り出したりする。また、その山や海を通じて、ムーミン谷にやってくる者もいる。

ムーミン谷には四季が存在し、ムーミンたちは秋になると冬眠の準備をはじめ、冬になると眠りにつく。そして、春になり雪解けの季節になれば、ムーミンたちは目を覚まし活動を再開するのだ。また、ムーミン谷に金銭や学校、労働といった概念は見受けられない(ただし警察署は存在する)。様々な価値観を持つ者同士が、お互いを受け入れ共存し、各々好きなことをして毎日を暮している。まさに理想郷(ユートピア)のような場所、それがムーミン谷である。

この物語の主人公であるムーミントロールは、白くて丸い愛らしい見た目をしており、カバのような姿を思い浮かべると分かりやすい。彼の両親のムーミンパパやムーミンママも同じ姿をしており、これをムーミン族という。ムーミン谷には多種多様な種族の住人が存在しており、他にも、ムーミンのガールフレンドであるスノークのおじょうさんは、ムーミンたちとほとんど同じ姿をしているが、彼女はスノーク族という別の種族である。大部分の住人は種族名がそのままキャラクターの名前になっているが、スナフキンやミイといった、個人名がついているキャラクターも存在する。

### 2-2 ムーミン誕生の経緯

戦争の影響もあり、常に金銭的に苦しめられ、

職業芸術家の生活を余儀なくされたトーベだったが、ムーミン物語は決して経済的な理由から生み出されたものではなかった。もちろん、ムーミン物語は戦争に大いに影響を受けて生まれた作品ではあるが、トーベにとってムーミン物語は「自分のための物語」であった。理想郷のようなムーミン物語を書くことで、苦しい戦争の現実から逃避しようとしていたのだ。

ムーミントロールはいつ誕生したのか、それはトーベが少女の頃まで遡る。ムーミントロールの原型が誕生したのはトイレの壁だった。それは、弟のペル・ウロフとの会話の返事に描かれたものだった。また、「ムーミントロール」という言葉はどこから生まれたのか。それは、叔父のエイナルが、食料棚でこっそりつまみ食いをする姪っ子のトーベに、注意するためにムーミントロールの名前を使ったのだ。そしてその名前はガム誌の署名に用いられ、水彩の風景画のモチーフになり、ようやく第一作目の『小さなトロールと大きな洪水 (1945)』で文章とイラストをもって命を吹き込まれたのだった。

### 第3章 考察

#### 3-1 ムーミン物語のモデルたち

ムーミン谷には、主人公のムーミントロールをはじめ、ムーミンパパ、ムーミンママ、スナフキンやミイの他にも様々な住人が暮らしている。ムーミン物語はその中心人物たちが織り成す冒険活劇だ。冒険に繰り出すだけでなく、時にはムーミン谷に試練が訪れることもある。真っ赤なルビーを追いかけてムーミン谷にやってきた孤独な氷の女王や、世界そのものを滅ぼしかねない彗星など、ムーミン谷は多くの危機に見舞われる。トーベは自身の身の回りをモチーフにして描く芸術家だ。この不思議なムーミン世界はトーベの何を投影して描かれたのだろうか。

##### 3-1-1 モラン

トーベはあらゆるものや人物から多くの影響を受けた。そして、それらを消化するように、身の回りで起こったことや自分の境遇などを作品に昇華させた。ムーミン物語に登場するモランもその

ひとりである。

スナフキンやミイなど、さまざまに癖のある者たちが受け入れられるムーミン谷で、唯一、全員に嫌われ、徹底的に拒絶される存在がある。それはモランである。モランは黒く、氷のように冷たい体をした女性の姿をしており、彼女が通った跡は凍りつき、彼女が近づくだけで寒さで草木は枯れ、明かりも消えてしまう。誰からも愛されない彼女は光を求め寄ってくるが、彼女が近づいた光はすぐに消えてしまうので温まることができない。

モランが初登場する『たのしいムーミン一家』(1948)が執筆されたのは、トーベが自身の同性愛について悩んでいた時期だった。

モランに追われてムーミン谷に逃げてきたトフスランとピフスランは、トーベと当時の恋人であったヴィヴェカを投影した人物だ。レズビアンとの関係を隠すために秘密の言葉を作り出して愛を語り合った2人のように、トフスランとピフスランもお互いにしか通じない言葉で話す。トフスランとピフスランがモランの元から持ち去ったルビーをめぐる裁判に証人として出廷したムーミン一家は、村に寒さをもたらすモランが嫌いだという理由で、トフスランとピフスランの正当性を主張した。トフスランとピフスランにつきまとうモランは、住人に歓迎されないどころか、法律にも守られない存在、まさに当時のフィンランドにおける同性愛の存在そのものだったのである。

##### 3-1-2 トゥーティッキ

トーベとトゥーリッキ・ピエティラが同棲を初めて1年が経った頃刊行されたのが『ムーミン谷の冬』(1957/2011)だった。2000年の3月、トーベは「『ムーミン谷の冬』を執筆することができたのは、すべてトゥーティのおかげだった」とトゥーリッキに感謝の意を表している。実際、小説の中で語られる「冬」について教えてくれたのはトゥーリッキだったからである。

話は雪が深々と降り積もるムーミン谷から始まる。ムーミンたちは先祖の習わしで毎年11月から4月まで長い冬眠をするのだが、物語の主人公ムーミントロールは、なぜか途中で起きてしまう。ムーミンママを起こそうとしたが、ママはぐっす

り眠っており、もう眠れなくなってしまったムーミンは、ムーミン屋敷から出て初めての冬を冒険する。そこで出会うのがこの物語の案内人ことトゥーティッキだ。そこにミイも加わり3人は冬の世界に触れていく。しかし氷姫の登場で、物語は急に毛色を変えることになる。氷姫とは、夕方になると海からやってくる、とても美しい顔をした女性のことだ。しかし、氷姫の顔を見たものはたちまち体が凍り付いてしまう。トゥーティッキに家の中にいるよう言われたムーミンたちは、家の中から氷姫を見ることにしたが、そこで家に入り損ねたりすが、氷姫によって氷漬けにされてしまう瞬間を目撃する。氷漬けになったりすを、仲間が家に運び込み、湯で温めたタオルでくるむのだが、ミイは「りすはもうすっかり死んでいるわよ」と言い放つのだった。

トーベはこの作品ではじめてムーミン物語に死の概念を持ち込んだ。前作の『たのしいムーミン一家』(1948)で広く名が知られ、児童文学作家としての評価が高まっていたヤンソンだったが、この『ムーミン谷の冬』では児童文学作家としては最高の名誉ともいわれる国際アンデルセン賞を受賞した。

この物語に出てくるトゥーティッキのモデルはまさしくトゥーリッキ・ピエティラである。冬眠から一人だけ目覚めてしまったムーミンは孤独を感じ、見たこともない冬に恐怖する。そんななか、雪の上に新しい足跡を見つけ辿っていった先で出会ったのが、トゥーティッキだった。いつもムーミンの世話を焼いてくれるムーミンママとは違い、賢く現実的なトゥーティッキは、ムーミンに様々なことを要求し、かつ解決できるようにたくさんの考える時間を与える。ムーミンに自立を促す存在が彼女だ。当時拡大するムーミンビジネスで疲労がたまっていたヤンソンは、トゥーリッキと出会い恋に落ちた。孤独に仕事を抱えるトーベと、そこへ新しい風をもたらしたトゥーリッキの二人の関係性が、この『ムーミン谷の冬』では如実に表れていると見て取れる。

### 3-1-3 住人たちのコミュニティ

芸術一家のヤンソン一家にはスウェーデン語系フィンランド人の芸術家たちが多く出入りしてい

た。限られたコミュニティで語り合う彼らと、ムーミン谷の状況を重ね合わせた中丸(2014)は「ムーミン谷は、世界の脅威を様々な感じながらも、社会の大多数から隔離されて知識活動にいそむエリートたちのサロン、あるいは、意思疎通が可能な少数派同士が、他の場所ではそれが不可能であるがゆえにいつそう強く結びつく、運命共同体ということになるだろうか(131頁)」と述べている。

当時の典型的な愛国者だったヴィクトルは、戦友の芸術家たちとよく自宅で宴会をし、酒を酌み交わした。禁酒法時代、ヘルシンキにはもぐりの酒場も存在したが、そういった場所にはたいてい警察が目を光らせていたため、もっぱら自宅で朝まで宴会をする日が多かった。幼いころから芸術家たちの宴を眺めていたトーベは、芸術界と芸術家のあり方や戦争、男性の攻撃性といったものを、宴に興じる父の姿から感じ取っていたのである。こういった幼いころの体験や、トーベが大人になってから所属した様々な知識人サークルは、様々な属性を持つ住人が行きかうムーミン谷の原型だったのではないだろうか。

### 3-2 戦争がもたらしたムーミン物語

1946年に刊行された『ムーミン谷の彗星』は、まさに戦争の真ただ中に執筆された。物語の序盤は、ムーミンとムーミンの友達のスニフがムーミン谷を探索するところから始まる。そしてムーミンたちが帰ってきたその日の夜、哲学者のじゃこうねずみが宿を求めてムーミン屋敷にやってくる。そこでじゃこうねずみはムーミン屋敷でムーミン谷に彗星が落ちるという話をする。怖くて彗星のことばかり考えてしまうムーミンたちをみて、ムーミンママはそれならば天文台に行き彗星のことを確かめるよう提案し、ムーミンたちの冒険ははじまる。結果として、彗星はムーミン谷をかすり、宇宙へと消えていったのだが、話を通して描かれる谷の異変の描写や、彗星が向かってくるシーンの臨場感は、やはり戦争を体験したトーベにしか描けないものではないだろうか。

「すべてのものが、どす黒いのです。空や川ばかりではありません。庭も、地面も、家も。みんな、まるでどす黒い、この世のものとは思えないほど、気味悪いようすをしていました(『ムーミ

ン谷の彗星』35頁)」とトーベは述べている。

これは、じゃこうねずみがムーミン屋敷を訪れ、異変を予言した次の日の描写である。一見児童文学にふさわしいマイルドな表現に読めるかもしれないが、どこことなく異変に対する果てしない絶望の感情がうかがえる。彗星が訪れることによって、ムーミンの世界には様々な変化が起こる。彗星が近づくにつれ、気温は上昇し、火山は噴火し、海は干上がる。竜巻が起こったり、ワシやおおだこなどの生き物たちが暴れまわる。『ムーミン谷の彗星』には1945年に投下された原子爆弾の影響が色濃く読み取れる。広島や長崎に原子爆弾が投下されたことは、全世界が震撼する大きな出来事だった。フィンランドで長く苦しい戦争を経験していたトーベだったが、原子爆弾が投下されたことで、彼女はボタン一つで一瞬にして世界が減びる可能性を目の当たりにしたのである。

彗星がいよいよ地球に到達するというとき、ムーミンたちは洞窟に逃げ込み、あたりが収まるまで耐え凌いだ。

「山全体がぐらぐらゆれて、あたり一面がふるえ、彗星が悲鳴をあげました。悲鳴をあげたのは、それとも、地球のほうだったのでしょか。みんなは、からだをちぢめ、長いあいだ、だきあったままでいました。どうくつの外では、山がくずれ、地はさけて、ガラガラとところがる音が、こだましていました。時間が、おそろしく長く感じられました。だれもが心細くてしかたありません。いつまでもいつまでもつづくかと思われたことが、やっとうすぎると、こんどは、完全にしづかになっていました。みんなは、いっしょうけんめいに耳をすましましたが、外はしいんとしづまりかえっているばかりです(『ムーミン谷の彗星』232頁)」

これは、まさに戦争を経験したトーベだから書けるリアリティである。Karjalainen (2014)はこの描写について、トーベの戦時中空襲に見舞われたときの防空壕での体験が関連していると述べている。

### 3-3 トーベとトフト

ムーミン物語の最終作である『ムーミン谷の十一月』(1970)は、ムーミン一家がいないムーミン屋敷が舞台である。そこにムーミン一家を求

めて訪れる、フィリフヨンカ、ヘムレンさん、トフト、スクルッタおじさん、ミムラとスナフキンたちのお話だ。ムーミンたちのいない屋敷で彼らはおしゃべりをし、パーティーをする。そうして満足していった彼らはひとり、またひとりと冬を迎える準備のためにムーミン屋敷を去る。その中でも、ひと際存在感を放つのがホムサ・トフトである。ムーミン一家をこよなく愛する彼は、この物語で話し手兼聞き手として重要な役割を果たす。そして、みんなが冬の準備のために屋敷を去った後も、海から船で帰ってくるであろうムーミンたちを迎えるために、海がよく見える山の上でじっと待っている。

「あっ、ムーミンパパが帆柱のてっぺんについたカンテラが見えてきました。おだやかで、あたたかな色の光です。たのもしく光っています。ヨットは、まだ、ずっと遠くのほうにいました。ホムサが森をぬけて岸におり、岸づたいに栈橋にいて、ヨットのもやいづなをうけとるのに、ちょうどまあうくらの時間は、まだ、たっぷりありました(『ムーミン谷の十一月』305-306頁)」

こうして長年にわたったムーミン物語は幕を閉じるのだ。それが本当に帰ってきたムーミン一家だったのか、トフトはムーミン一家に会えたのか、それはトフトにしか分からない。トフトはトーベの分身である。結末はトーベだけが知っている。物語では、トフトをはじめ来客たちは皆ムーミン一家を求めてやってくる、しかしムーミンたちが出払った屋敷はすっからかんで、客たちはそこでしばらくムーミンたちについて語り合い、一家を求める心に決着をつけ谷から出ていく。この心の動きは、トーベが母シグネに対してつけた心の整理と同じだったに違いない。1970年の6月、シグネはボルヴォーの病院で息を引き取った。そのとき『ムーミン谷の十一月』はすでに書きあがっていたが、病状の思わしくない母を見て、トーベは覚悟するものがあっただろう。ムーミンママを恋しく思うトフトは、シグネを思うトーベの気持ちそのものだった。

こうして『ムーミン谷の十一月』はもはや児童文学の域を超え、大人向け小説になったのである。

## おわりに

この論文を書くにあたって参考にした文献はいずれも「仕事」と「愛」に重きが置かれていた。トーベ・ヤンソンを表面的にしか知らなかった私は、彼女の歩んだ人生に非常に驚いた。ムーミン作家としての一面しか知らなかった私は、イメージとしてフィンランドの孤島で芸術活動をしている穏やかな作家だと思っていた。それも間違いではないのだが、彼女の生き様の人間臭さに、私は少なからず驚いた。しかし、この人間臭い一面があるからこそ、ムーミン物語は生まれたのである。

母の勤勉さを学んだトーベは、芸術家として一切妥協を見せなかった。『ムーミン谷の十一月』が刊行された当初は、「子供向けでない」、「暗すぎる」、「本当に終わってしまうのか」といった批判や意見が多く出た。しかしトーベは批判が出たからといって子供向けに書き直したり、明るい雰囲気にはしなかった。ムーミン物語は芸術であり、トーベの人生がふんだんに詰まった作品だったからである。ガラム誌に挿絵を描いていた頃から、トーベは自分の考えたままを自由に表現した。仕事において自分を貫き通し一切妥協しなかったからこそ、今もなお、ムーミンは国民的キャラクターとして全世界のファンたちに愛されている。

度重なる戦争の中、仕事にも恋愛にも全身全霊で取り組んだある芸術家の人生を知る機会を得たことに、心から感謝したい。

## 参考文献

- 中丸禎子 (2014) . 北の孤島の家族の形 海、自分だけの部屋、モラン ユリイカ 46,128-142. 青土社
- Westin,B. (2007) .*Tove Jansson : Ord, bild, liv.* Albert Bonniers Forlag [畑中麻紀・森下圭子 (訳) (2011). トーベ・ヤンソン—仕事、愛、ムーミン—. 講談社]
- Jansson,T. (1957) .*Trollvinter.* Schultz [山室静 (訳) (2011). ムーミン谷の冬. 講談社]
- Karjalainen,T. (2014) .*Tove Jansson : Tee työtä ja rakasta.* Tammi [セルボ貴子・五十嵐淳

(訳) (2014) . ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン. 河出書房新社]

## 引用文献

- 中丸禎子 (2014) . 北の孤島の家族の形 海、自分だけの部屋、モラン ユリイカ 46, 青土社 131.
- Jansson,T. (1946) .*Kometjakten* Schultz : 下村隆一 (訳) (2011) . ムーミン谷の彗星 講談社 p.35, 232.
- Jansson,T. (1970) .*Sent i november.* Schultz : 鈴木徹郎 (訳) (2011) . ムーミン谷の十一月 講談社 305-306.